

LANCE: THE HISTORY MAN P.18

「君は大馬鹿野郎だ」と言うモーテン。彼（ランス）は否定もしないが、そういったすべての彼に対する批判に甘んじている訳ではない。コロラド州アスペンまで彼を追いつめた Rouleur が誇る大胆不敵なエディター “Morten Okbo” とフォトグラファー “Jakob Kristian Sorensen” が、スポーツの歴史上最も中傷されたサイクリスト、ランス・アームストロングとともに過ごした数日間の記録。

NORTH RIDING P.48

by MARTIN PROCTER
カプチーノ・サイクリング・クラブのウィンターサイクリング。issue47 で好評を博した Martin Procter によるイラストエッセイ。

FLIGHT OF THE CONDORS P.50

コンドルの創始者モンティ・ヤングが持つすばらしい記憶の数々、トム・シン普森からブラッドレー・ウィギンス、エリック・クラプトンからミックジャガーにまで愛された Condor Cycles。

IZOARD P.70

常に化するツールドフランス。そしてほとんど変わることのないイゾアール峠。そこにはスキー用のリフトも古めかしいレストランもない。ただ道があるだけでも感動的なイゾアール峠。現在ツールを取り巻く環境を見てみると、新しい峠をコースに入れる、観光産業に渴望される、似たようなホテルの氾濫、そういった物が現れては消える。そういうツールにあって変わらずにワイルドでわくわくする場所、それがイゾアール峠。

THE FABULOUS WORLD OF CYCLING P.84

書棚から溢れ床を埋め尽くす本の山、その中にあるほこりっぽい五冊の本、背表紙をなぞるとそれは “The Fabulous World of Cycling”。1983 年から 91 年まで刊行されていたロードレース年鑑でワンデイ・クラシックレースとステージレースが半分ずつある紙面。ロードレースの巨人たちのイメージの数々、そして 1980 年版からエディ・メルクスすばらしい見識。

BERLIN SIX-DAY: THE ELLIPTIAL TREADMILL P.92

サイクリングカレンダーの中で最高のトラックレースの一つ Six-Day Race。1920 年代のベルリンこそまさに Six-Day を体現するに相応しい都市。当時のジャーナリスト Ergon Erwin Kisch をキーパーソンに据えた Six-Day 論。

SUBSTANCE P.107

by MATT SEATON
初乳に重炭酸塩、アオゲイトウ…
スポーツの精神に反する物は？その線引きとは？

YELLOW FLUO P.109

度重なるドーピングスキャンダルを受けてチーム存亡の危機をさまようこととなったイタリアのチーム Neri Sottori(以前の Vini Fantini) と過ごしていた Colin O'Brien による手記。

VAN DER HAAR, SUPERSTAR P.134

まだシクロクロスをロードレースオフシーズンのベルギー人ファン達の気をそらすための気遣い染みだした見世物だと思っているあなた、そんなあなたは Lars Van Der Haar を知るべきだ。クロスシーンを揺さぶる稲妻 Lars をヨーロッパのクロスシーンを撮り続けている Balint Hamvas の写真とともに紹介します。

BILLY BILSLAND P.156

1968 年メキシコ五輪出場、PEACE RACE ステージ勝利などなど、70 年代の PEUGEOT チームや RALEIGH チームで活躍したインターネット以前の偉大なスコットランドレーサー、Billy Bilsland のレーサー時代とその後。

MARMITE P.178

by ROBERT MILLAR
シクロクロス…本当に、勘弁してほしい…執筆拒否者 Robert Millar…

